

色彩領域に基づいたロールシャッハ把握型変数と 秩序に対する選好間の関係についての追試研究

阿 部 宏 徳

A Replication Study on relationships between the Rorschach Manner of Approach Variables and Preference for Order

Hironori Abe

抄 録

ロールシャッハ・テスト研究における色彩領域に基づいた新しい把握型の分類法と秩序に対する選好尺度間の相関関係（阿部, 2005）に関する追試を行った。65名の大学生に対してロールシャッハ・テストと秩序に対する選好尺度が試行された結果、以前とは異なり、いずれの把握型変数も同尺度との間に有意な相関関係は見いだされなかった。したがって、必ずしも新しい把握型の可能性が否定されたわけではないが、阿部（2005）の調査結果の利用には慎重さが必要と示唆された。

キーワード：ロールシャッハ

把握型

色彩領域

秩序に対する選好

問題と目的

ロールシャッハ・テスト（以下、ロ・テスト）は本邦の臨床心理学的アセスメントにおいて長年最も用いられているものの一つである。そのロ・テストにおいて近年ではしばしば「反応領域」と呼ばれる概念や反応分類法は数あるロ・テストの施行法（システム）すべてで採用されているように重要なものと見なされている。なお本稿では、アセスメントにおいて重要なのは用いられた領域（最終的な結果）ではなく、そのインクブロットを視覚的に捉えて利用する過程や調査協力者の行動パターン（型）であるという視点から、過去にしばしば用いられてきた「把握型」という呼称を用いる。

最も用いられているものの一つであるロ・テストも古くはCronbach (1955)、近年ではWood, Nezworski, Lilienfeld, & Garb (2003) などから、その実証性や効率性に関して多くの、かつ厳しい批判を受け続けている。Wood et al. (2003) は、日本を除いて事実上の国際標準となっている包括システムはその支持者が主張するほど実証性は高くなく、その程度は旧来のシステムとほとんど変わらないと批判している。また、同書の中でロ・テストの仮説は一度支持する調査結果が出ても、再調査を行うと同様の結果は出ないことが非常に多いという指摘も行っている。

その中で、阿部 (2005) は“物の形（の知覚）というものが色彩間に存在する大きな断絶、つまり輪郭が任意の一点で閉じられるからこそ物の形が知覚されるならば、把握型においても「色は眼を捉える」という被検者への影響力や拘束力が考慮されるべき”と主張し、これまでの把握型システムには図版を構成する色彩への注意が不足していることを指摘した。そして、被検査者の図版上に存在する色彩領域へのアプローチの仕方によって反応を分類する方法を提案した。具体的には、領域の組織化の有無などにかかわらず、色彩領域の一部を切り取って用いながら、最終的に他の一部は用いないまま残した反応はCut Dと、領域の組織化の有無にかかわらず、最終的に色彩領域に従った反応をNon-Cutと分類した。さらに、Non-Cutの中でも部分反応であるものはNon-Cut Dと呼んだ。反応例としては、Non-Cut DではIIカード中央の空白領域に対する「飛行機」やIIIカード中央の赤色領域に対する「リボン」など、Cut DではIカード中央に対する「女性」やVIIIカード左右両端に対する「四足獣」などがあげられる。なお、多くのWはNon-Cutとなる。

阿部 (2005) は、これらの中でもNon-Cutが色という図版または視知覚の秩序に沿った反応、Cut Dは色という秩序に沿わなかった反応と考え、ロ・テストと認知的完結欲求尺度（鈴木・桜井, 2003）の下位尺度の一つである「秩序に対する選好尺度（preference for order scale）」を55名の大学生・大学院生に施行した。その結果、反応数（R）に占めるNon-Cutの割合（Non-Cut%）と秩序に対する選好尺度との間には.478、Cut Dの割合（Cut D%）と同尺度との間には-.466という有意なSpearmanの順位相関が見られたという報告を行った。

しかし、先述のWood et al. (2003) の指摘通り、ロ・テスト研究では一度見られた関

連が追試では同様の結果が得られないことがしばしばあるとされる。そこで、阿部（2005）の結果が再現されるか確認する必要があると感じられたために、その追試を行うこととした。

方 法

調査協力者 関東圏内の大学の講義中に調査の説明および協力者の募集を行い、協力の意思を示した者に後日連絡を取り、都合がついた者に大学の実験室に来てもらった。調査前には改めて調査目的や内容等について口頭および書面で説明し、その上で了解が得られた者を調査対象とした。その結果、本調査に対しては65名（男性25名、女性40名、平均年齢20.0歳、SD=1.28、range=18-24）から協力が得られた。まずロ・テストを包括システムによって個別式で施行した後に、他の目的のために村上・村上（1999）の主要5因子性格検査（BFPI）を行った。そして、その後に認知的完結欲求尺度（鈴木・桜井，2003）を施行した。

ロールシャッハ・テスト 反応のコード化は、筆者ともう一人の調査施行協力者のどちらかが調査施行者として調査協力者に対してロ・テストを行い、まずその調査施行者が反応を阿部（2005）とExner（2003）に従ってNon-Cut、Non-Cut D、Cut Dおよび全体反応（W）、普通部分反応（D）、特殊部分反応（Dd）をコード化した。その後もう一方がコード化の妥当性について検討を行った。両方でコードが一致しない反応については両者間で議論を行い、最終的に分類・コードを決定した。

秩序に対する選好尺度 秩序に対する選好尺度とは認知的完結欲求尺度の下位尺度の一つであり、鈴木・桜井（2003）がWebster & Kruglanski（1994）が作成した42項目の同名の尺度を基に日本人用に再構成した3因子20項目からなる尺度である。認知的完結欲求とは「問題に対して確固たる答えを求め、曖昧さを嫌う欲求」（Kruglanski & Webster, 1996）（筆者訳）と定義され、秩序に対する選好は「生活において環境を構造化することを好み、それを求める傾向」（鈴木・桜井，2003）と定義される。

秩序に対する選好尺度は7項目からなり、「決まった場所に決まったものがあるのが好きだ」や「規則正しい生活が自分の性にはあっていると思う」という項目に代表されるように、日常生活において予め定まった構造や様式を好む傾向を表している。各項目は“全く当てはまらない（1点）”から“非常に当てはまる（6点）”の6段階評定で、点数が高いほど秩序に対する選好が高いとされる。最終的な尺度得点は合計得点を項目数で除することで得られる。内的一貫性、再検査信頼性、および構成概念妥当性は鈴木・桜井（2003）によって確認されている。

以上はほとんど阿部（2005）で行われた方法と同じである。違うのは、調査を行った地域（前回は関西地方）とロ・テストの施行法（前回はKlopfers法）である。

結果と考察

阿部 (2005) の把握型変数の割合 (Non-Cut%、Non-Cut D%、Cut D%) および包括システムの把握型変数の割合 (W%、D%、Dd%) のそれぞれと秩序に対する選好尺度間の Spearman の順位相関係数を算出した。その結果、Non-Cut%と秩序に対する選好尺度との間には $rs = .01$ ($p = .96$)、Non-Cut D%と同尺度との間には $rs = .03$ ($p = .82$)、Cut D%と同尺度との間には $rs = .05$ ($p = .67$)、W%と同尺度との間には $rs = -.03$ ($p = .82$)、D%と同尺度との間には $rs = .003$ ($p = .98$)、Dd%と同尺度との間には $rs = .03$ ($p = .84$) という相関係数が得られた。

以上より、阿部 (2005) とは異なり、今回の調査では Non-Cut、Non-Cut D、および Cut D と秩序に対する選好間の線形的な関連は示されなかった。Wood et al. (2003) は「悲しくなるくらい口・テストの追試研究は知見を再現できない」と述べたが、今回の結果もそれに当てはまる。協力者の違いや施行法の違い、あるいはどちらかの結果が偶然であるなど、その原因は様々に考えられるが特定するのは難しい。しかし、阿部 (2005) の結果を普遍的・安定的なものとは見なすことには慎重であるべきとは言えそうである。

以上は阿部 (2005) で提出された問題点や新しい把握型システムの重要性や可能性をすべて否定するもの

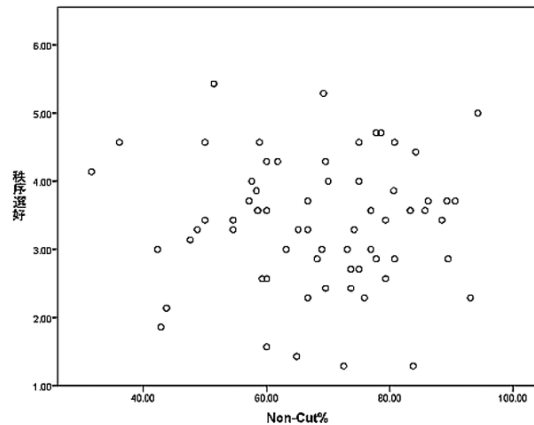


Figure 1 Non-Cut%と秩序に対する選好尺度

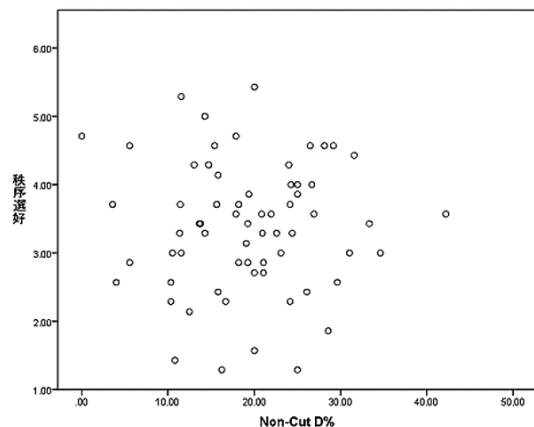


Figure 2 Non-Cut D%と秩序に対する選好尺度

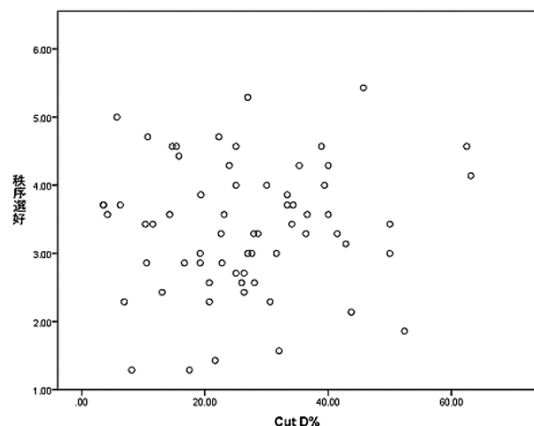


Figure 3 Cut D%と秩序に対する選好尺度

Table 1 記述統計と把握型変数と秩序に対する選好尺度間の順位相関係数

	平均	標準偏差	最小	最大	相関係数
秩序に対する選好尺度	3.38	0.95	1.29	5.43	
Non-Cut%	68.29	14.43	31.58	94.29	.01
Non-Cut D%	19.22	8.07	0.00	42.22	.03
Cut D%	26.48	13.78	3.45	63.16	.05
W%	52.15	17.47	8.33	92.86	-.03
D%	29.53	12.49	3.57	66.67	.003
Dd%	18.32	10.09	0.00	57.89	.03

ではないが、証拠の一つとしてあげられた知見には問題がある可能性が示された。したがって、その重要性や可能性を主張するためには、さらなる調査を含めた、新たな実証的な知見が必要と考えられる。

参考文献

- 阿部宏徳 (2005). インクプロット把握における色彩の重要性－色から見た把握型 ロールシャッハ法研究, **9**, 15-24.
- Cronbach, L. J. (1955). Review of the book *Developments in Rorschach technique*. Volume 1 . Technique and theory. *Journal of Educational Psychology*, **46**, 121-123.
- Exner, J. E. (2003). *The Rorschach : A Comprehensive System. Volume 1* (4th Edition). New York : John Wiley.
- 中村紀子・野田昌道 (監訳) (2009). ロールシャッハ・テスト 包括システムの基礎と解釈の原理 金剛出版
- Kruglanski, A. W., & Webster, D. M. (1996). Motivated closing of the mind: "Seizing" and "freezing". *Psychological Review*, **103**, 263-283.
- 村上宣寛・村上千恵子 (1999). 性格は五次元だった－性格心理学入門－ 培風館
- 鈴木公基・桜井茂雄 (2003). 認知的完結欲求尺度の作成と信頼性・妥当性の検討 心理学研究, **74** (3), 270-275.
- Webster, D. M. & Kruglanski, A. W. (1994). Individual differences in need for cognitive closure. *Journal of Personality and Social Psychology*, **67**, 1049-1062.
- Wood, J. M., Nezworski, M. T., Lilienfeld, S. O., & Garb, H. N. (2003). *What's Wrong With the Rorschach? : Science Confronts the Controversial Inkblot Test*. Jossey-Bass Inc Pub. (宮崎謙一 (訳) (2006). ロールシャッハテストはまちがっている－科学からの異議 北大路書房)

Abstract

A replication study on the correlations between the new Rorschach's manner of approach classification which is based on color areas and preference for order (Abe, 2005) was carried out. The Rorschach test and the scale of preference for order were administered to 65 participants. The results differed from the previous study and demonstrated no significant correlation between the manner of approach variables and its scale. Accordingly, these results suggest that not all potentials of the new classification are denied, although we need to be cautious in utilizing Abe's (2005) results.

Keywords : rorschach

manner of approach

color area

preference for order